

## 要 旨

本研究は、高等学校公民科の授業において、グループによる意見交換を基に思考力、判断力、表現力を高め、意見の形成を支援するワークシートの作成と活用の在り方を探ったものである。ワークシートは多様な考え方を整理し、自分の意見をまとめることができるように作成した。生徒は、最初に考えた自分の意見を基に意見交換を行い、内容の深まった具体的な意見を記述できるようになった。また、ユニバーサルデザインの視点を授業に取り入れることで、発表や文章記述を苦手とする生徒も含め、誰もが課題を追究できるようになり、テーマに沿って意見をまとめることができた。

〈キーワード〉 ①意見の形成 ②社会への参画 ③ユニバーサルデザイン

### 1 研究の目標

持続可能な社会の形成に積極的に参画していくための思考力、判断力、表現力を高めるために、公民科科目「現代社会」における社会の諸課題を追究する過程で、自分の意見を形成させる指導の在り方を探る。－授業のユニバーサルデザインの視点を取り入れて－

### 2 目標設定の趣旨

高等学校学習指導要領解説公民編では、科目「現代社会」について、「議論などを通して自分の考えをまとめたり、説明したり、論述したりするなど課題を探究させる学習を行い、人間としての在り方生き方についての学習の充実を図ること」<sup>1)</sup>と改訂の要点を示している。この「現代社会」の授業では、社会の諸課題を直接的に取り扱う。社会の諸課題は、どれを取っても最善の解決策があるわけではなく、その解決策を考えていくことがこの科目の目標の1つである。しかし、生徒の理解は知識の獲得にとどまりがちであり、社会の諸課題に対して自分の意見を形成し、持続可能な社会の形成に積極的に参画しようとする意欲や能力を備えているとは言い難い。そのため、社会の諸課題に対して自分の意見を表現し、他人の意見を取り入れ、再度総括的に自分の意見を形成する過程を重視することが、社会の形成に積極的に参画する生徒を養うことにつながると考える。

一方、文部科学省の報告では、特別な教育的支援を必要とする児童生徒数について、「約6パーセント程度の割合で通常の学級に在籍している可能性」<sup>2)</sup>があるとしている。また、現在、高等学校においても保健室登校や不登校の生徒はどの学校も抱えている課題であり、一度入学をしたにも関わらず転退学をしていく生徒がいる。その原因は多様であり、様々なアプローチを通して解決されていくべき課題ではあるが、教科担任制が取られている高等学校においては、特別支援教育に対する教師一人一人のスキルの向上が求められている。そのうえで、配慮を要する生徒に対しては、その生徒に関わる教師が生徒の特性を共通理解し、一貫した指導・支援に取り組む必要があると考える。

さらに、平成23年度大学入学者選抜大学入試センター試験より、障害別受験特別措置内容一覧に「(オ)発達障害」の項目が加わったことで、高等学校の普段の授業の中でも発達障害のある生徒に対して、その特性に応じた授業づくりが求められている。また、佐賀県では、ユニバーサルデザイン推進県として平成19年度より県立学校施設のユニバーサルデザイン整備事業が進められており、今後は、施設・設備にとどまらず意識面でもユニバーサルデザインへの関心を高めていくことが必要となっていく。

そこで、本研究ではグループの研究テーマ、研究課題を受け、社会の諸課題について自分の意見を形成する過程において、段階的に社会の諸課題に対する自分の意見を深めていく指導の在り方を研究する。その過程において「発達障害の有無に関わらず、クラスの中のすべての子にとって分かりやすい対応を

工夫」<sup>3)</sup>するというユニバーサルデザインの視点を授業に取り入れることで、表現を苦手とする生徒であっても自分の意見を形成し、さらに、他人の意見を取り入れ、自分の意見を深めることができるようになるのではないかと考え、本目標を設定した。

### 3 研究の仮説

単元のまとめの段階において、ユニバーサルデザインの視点を取り入れたワークシートを開発し、自分の考えをもち、お互いの意見交換を通して、他人の考えを取り入れ、自分の考えを深めていく手立てをとれば、社会の諸課題に対する思考力、判断力、表現力を高めることができるであろう。

### 4 研究方法

- (1) 研究紀要や実践事例を通して、思考力、判断力、表現力を高める授業に関する理論研究
- (2) 文献や実践事例などを通して、授業のユニバーサルデザインに関する理論研究
- (3) 検証授業内容や授業に関するアンケート調査を基にした生徒の実態調査
- (4) 検証授業を行い、意見形成の手立ての検証及び考察

### 5 研究内容

- (1) 思考力、判断力、表現力を高める授業に関する理論研究を基に、基本的な授業の形態を明らかにする。
- (2) 授業のユニバーサルデザインに関する理論研究を基に、基本的な支援の在り方を明らかにする。
- (3) 質問紙による授業に関する実態調査を実施し、その結果を分析し、授業の改善点を明らかにする。
- (4) 所属校の第1学年における現代社会の授業を行い仮説を検証し、手立ての有効性を示す。

### 6 研究の実際

- (1) 文献等による理論研究

#### ア 公民科が求める力

新学習指導要領で示された改訂の要点では、議論などを通して自分の考えをまとめたり、説明したり、論述したりするなど課題を探究させる学習を行うことを求めており、基礎的・基本的な知識・技能を習得させ、思考力、判断力、表現力等の育成を行っていく事を基本的な考え方としている。生徒にとって、そのような力が必要とされる場面の1つが卒業後の進路を決定するときである。進学や就職時に小論文や作文を求められることは多く、そのテーマは社会的な問題に関したものがほとんどである。自分の考えを筋道を立てて説明し、相手に伝える力が生徒に求められており、そのような力を高める学習を進めていく必要がある。

そのための手立てとして、授業においてグループによる意見交換を行う場面を設定すれば、生徒は自分の考えを筋道を立てて説明できるようになり、相手に伝える力を養うことができるようになるのではないかと考えた。あるテーマについて人と話し合うことは、意義のあることだ。自分の考えを相手に理解してもらえるように説明しなければいけないし、また、自分に十分な考えがないときでも、他の生徒の考えを知ることができる。道田は「対話を通して、思考が刺激され、深まる状況を作ることが思考力を育てるための要」<sup>4)</sup>だと指摘している。さらに、嘉納は「社会科の授業における対話での学び合いは、社会的事象に関する認識の深まりを期待するものであるから、社会科の学力の中心的要素である、思考力(社会的事象を対象化し客観的に捉える力)と判断力(客観的把握をふまえ、事象を自分に引きつけ、適切に捉える力)を主に培うものであると考えている」<sup>5)</sup>としている。

以上のような点から、公民科の授業においてグループによる意見交換を行うことは、生徒の思考力、判断力、表現力を育成するために有効な手立てといえる。

#### イ ユニバーサルデザインの視点

文部科学省の調査報告によれば、学習障害(LD)、注意欠陥/多動性障害(ADHD)、高機能自閉症等、学習や生活の面で特別な教育的支援を必要とする児童生徒数について、約6%程度の割合で通常の学級に在籍している可能性が示された。

日本学生支援機構が平成23年度に行った調査によると、大学、短期大学及び高等専門学校に在籍する全学生のうち0.32% (10,236名)が何らかの障害をもっており、そのうち14.2%(1,453名)が発達障害の診断を受けていた。調査対象である1,206校における、障害学生の在籍割合は66.9%(807校)であった。平成22年度の調査では障害学生数が0.27% (8,810名)であり、そのうち発達障害の診断を受けていた学生は12.1% (1,064名)、障害学生の在籍割合は64.3% (785校)であった。これらの数字はここ数年、増加傾向にある。

また、平成23年度大学入学選抜大学入試センター試験において、障害別受験特別措置に「発達障害」の項目が追加された。この受験特別措置を利用した志願者は1,384名であり、そのうち発達障害を理由とする志願者は95名であった。また平成24年度のセンター試験では、受験特別措置を利用した志願者が1,472名で、そのうち発達障害を理由とする志願者は135名に増加した。全体の志願者数が昨年度よりも0.6% (3,447名)減少していることと併せて考えても、この受験特別措置を利用した志願者は今後も増加していくことが予想される。

さらに、佐賀県においては、平成20年3月に中学校を卒業した生徒の全日制高等学校への進学率は約94%であった。この年の卒業生のうち、中学3年次に不登校を経験した生徒の全日制高等学校への進学率は39.6%であり、発達障害のある生徒の全日制高等学校への進学率は73.9%であった(表1)。

表1 発達障害のある生徒の中学校卒業後の進路(公立中学校)(佐賀県教育委員会より)

進路先	進学				就職	その他	計
	全日制	定時制	通信制	その他			
人数	130	6	8	22	5	5	176
割合(%)	73.9	3.4	4.5	12.5	2.8	2.8	

これらの報告はどれも調査時期が異なり、対象にも関連性がないため総じて論ずることはできない。しかし、発達障害等の診断を受け学習に困難を覚える児童生徒、あるいは、診断は受けないものの、学習において何らかのサポートを必要とする児童生徒がクラスに在籍していることを前提に、授業を計画していくことは意味のあることといえる。そして、その取組の1つが授業にユニバーサルデザインの視点を取り入れることであると考えられる。

ユニバーサルデザイン(universal design)という言葉は主に工業デザインの分野を中心に広く一般的に使われてきた。「できるだけ多くの人々が利用可能であるようなデザイン」を基本的な考えとしており、対象を障害者に限定しないとする考え方が教育の分野にも影響を与えた。アメリカで障害のある児童生徒を支援してきた組織であるCAST(the Center for Applied Special Technology)はこの考え方を取り入れ、「学びのユニバーサルデザイン(Universal Design for Learning)」(以下、UDLとする)としてその原則を示した(資料1)。本研究ではこの原則を基に、生徒の知識・理解を手助けする方法を探る。

原則Ⅰ	提示に関する多様な方法の提供 “w h a t” … 何で学ぶか
原則Ⅱ	行動と表出に関する多様な方法の提供 “h o w” … どのように学ぶか
原則Ⅲ	取り組みに関する多様な方法の提供 “w h y” … なぜ学ぶか

資料1 UDL 3原則(CASTより)

(2) 実践研究

理論研究の考え方を基に、研究の全体構想(図1)を立て、以下のとおり実践研究を行った。

ア 生徒の高等学校の授業に対する意識について

生徒が高等学校の授業においてどのような点につまずきを感じているかを調査するため、第1学年全クラス(3クラス・116名)に対して、高等学校の授業全般に関するアンケートを実施した。アンケートは生徒自身に関するもの7項目、授業に関するもの4項目の計11項目で行った(表2)。その結果、「先生の発問に対して、積極的に意見を述べたり、発表することが苦手である」(表2・質問項目②)と回答した生徒は、「あてはまる」、「ややあてはまる」を合わせて58.7%(次頁図2)、「長い文章を書くことは苦手である」(表2・質問項目⑦)と回答した生徒は、「あてはまる」、「ややあてはまる」を合わせて67.3%(次頁図2)だった。

公民科の授業では、発問に対して一部の生徒が発言し、その生徒を中心に授業が展開される場面が時折見られる。アンケートの結果からも、全ての生徒が意見を表出するためには、教師の発問に対して口頭で答える以外に、表現させるための様々な選択肢が必要であることがうかがえる。また、授業の中に長い文章を書く場面を適度に設定していくことも必要であると考えられる。

さらに、「内容の説明が分かりにくく、授業のポイントがつかみにくいことがある」(表2・質問項目⑧)と回答した生徒は、「あてはまる」、「ややあてはまる」を合わせ50.9%(次頁図2)であった。この結果については、アンケートの記述欄より、教科によって内容の説明が分かりにくかったり、授業のポイントがつかみにくかったりしていることが分かった。特に、数学や理科あるいは数学的な処理を伴う専門科目等については、「分からないところをもうすこしゆっくり説明してほしい」、「時々先生に回ってきてほしい」などと回答している。また、同じ授業でも授業進度が「ちょうど良い」と答えた生徒と「早い」と答えた生徒が混在しており、適切な授業進度が生徒によって異なることが分かる。高等学校では教科によって習熟度別クラス編成を行い、生徒の学力差に応じた授業を行っているところも多い。

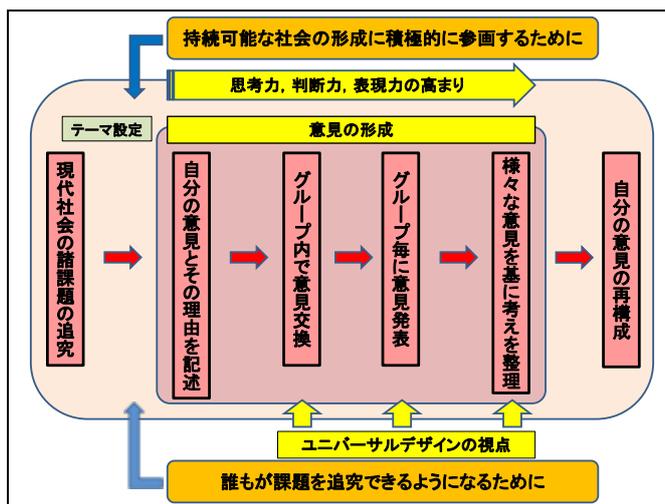


図1 研究の全体構想

表2 学習全般に関するアンケートの項目

自分自身について	
①	授業のノートや教科書などの忘れ物がある。
②	先生の発問に対して、積極的に意見を述べたり、発表することが苦手である。
③	課題や提出物を期限までに提出できないことがある。
④	先生の指示を聞きもらし、何をしたらいいか分からなくなることがある。
⑤	教科書(文章)を読むことに時間がかかる。
⑥	黒板の内容をノートに写すことに時間がかかる。
⑦	長い文章を書くことは苦手である。
授業について	
⑧	内容の説明が分かりにくく、授業のポイントがつかみにくいことがある。
⑨	説明の際の声が聞こえにくかったり、話すスピードが速すぎることもある。
⑩	板書が分かりにくく、ノートが取りづらいことがある。
⑪	先生の言葉が難しく、言葉の意味が分からないときがある。

※ 質問項目の②・⑦・⑧は本文で説明している

しかし、公民科の授業など、習熟度別編成があまり行われない教科では、クラス内の学力差に対応した授業を計画していく必要があると考える。

また、その他として、板書時の字の大きさや色チョークによる強調、板書事項の整理などを求める回答もあった。色チョークは、板書時の文字の見えやすさを考慮に入れて板書計画を作成すれば、生徒を支援することにつながる。また板書事項も、例えば、書くことと聞くことを同時に行うことが苦手な生徒もいるため、その集団に応じた適切な板書量や配列を計画することも生徒の学習効果を上げることにつながると考えられる。

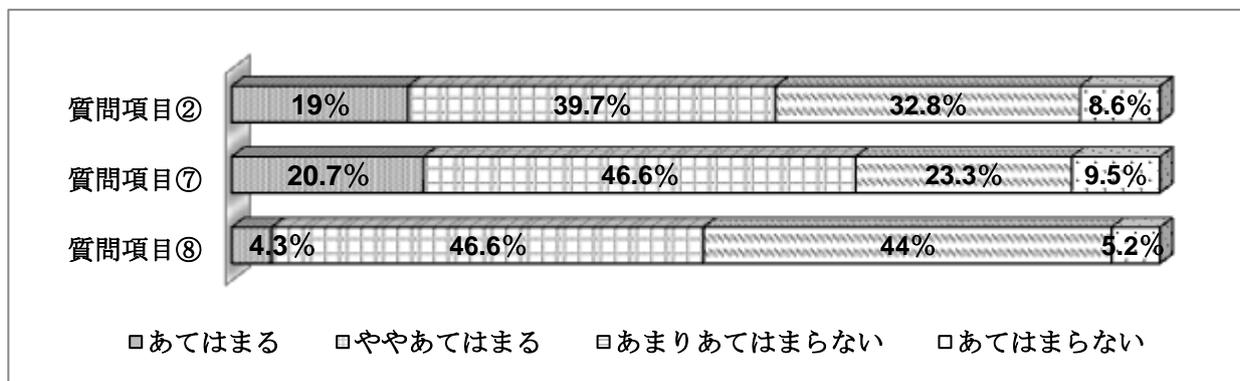


図2 高等学校の授業全般に対する生徒の意識(前頁表2より一部抜粋)

## イ 授業の実際

### (ア) 検証授業に至るまでの流れ

検証授業は第1学年の公民科科目「現代社会」で行い、単元は「基本的人権の保障」を扱った。この研究では、グループによる意見交換を基に、生徒に自分の意見を形成させることをねらいとしている。そのため、検証授業の前に関連する単元の授業を行い、生徒が意見を形成しやすい環境を整えることにした。また、ユニバーサルデザインの視点による授業の見直しにも取り組んだ。具体的には、授業で使うワークシートを生徒の使いやすさを基準に作成し直した。また、板書方法を工夫し、ワークシートを使った授業で生徒が戸惑うことなく記入を進められるようにした。

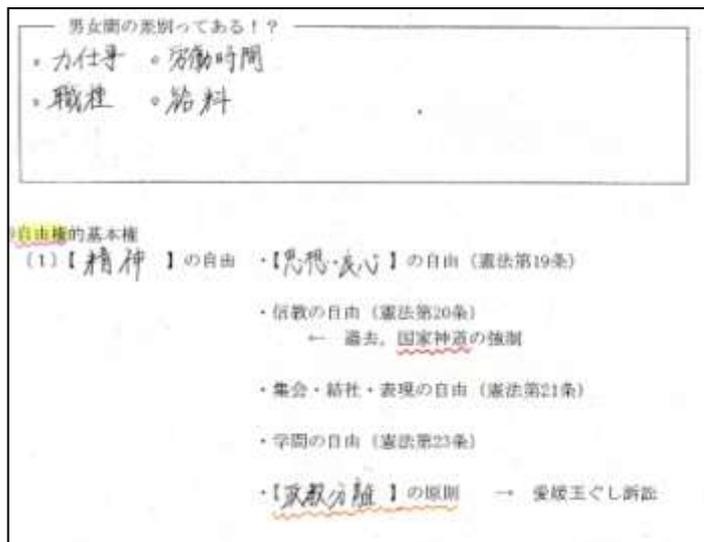


図3 生徒が記入したワークシート(一部抜粋)

関連する単元の授業では、1時間に1つ、簡単な記述を伴う発問を設定し、ワークシートに記述させた(図3)。基本的人権の1つである平等権の学習を進める過程で、「男女間で差があると感じることはあるか」との発問を行い、ワークシートへの記入を促したが、ほとんどの生徒が記述できないでいた。数名の生徒を指名し答えさせたが、板書されたその生徒の意見をワークシートに写した生徒がほとんどだったことが回収されたワークシートを検証した結果分かった。過去の授業での経験からも、生徒は発問に対する答えを考え、記入を始めるまでに時間が掛かることが多い。隣り同士で話し合わせたり、更に時間を保障するなどすれば、多くの生徒が意見を記述できたと考える。

#### (イ) 検証授業

基本的人権の保障に関する授業を行った後、生徒に自分の意見を形成させるための授業を計画した。この授業で取り上げるテーマは、基本的人権の保障を授業した際に教科書に資料として掲載されていた「夫婦別姓」とした。ただし、「夫婦別姓」については、授業では取り扱わなかったため、生徒には参考資料を配布し、事前に読んでおくこととした。

授業の流れは次のとおりである(図4)。はじめに、今日の授業の進め方を生徒に説明し、ワークシートの活用にイメージをもたせた。授業の最後に自分の意見をまとめるため、グループで意見交換を行い、意見記述のための材料を集めることを生徒に意識付けた。次に今日のテーマについて補足説明を行い、ワークシートを配布して、生徒に最初の意見を記述させた。ここで記述させた意見がグループで意見交換する内容となるため、全ての生徒が理由まで書き終えるのを確認し、グループでの意見交換へ進んだ。

意見交換は、4名でグループを編成し行った。これまで、5～6名のグループで意見交換の授業を行ったところ、意見交換に十分加われない生徒も出てきたため、4名程度が適当だと考え、編成を行った。

グループでの意見交換では、「夫婦別姓に賛成か、反対か」、「夫婦別姓のメリット、デメリットは何か」について意見交換を行わせた。生徒はお互いの意見を聞きながら、必要なことをワークシートに記入していった。自分と異なる意見に激しく反応する場面などもあり、活発な意見交換ができていた。

意見交換がある程度進んだところで、グループ毎に代表的な意見を発表させ、黒板に整理をしていった。賛成や反対の理由を挙げさせながらそれぞれの意見を整理し、続けてメリットとデメリットについても同様に黒板に整理していった。生徒は、自分のグループ以外から出された意見をこのときにワークシートに記入していった。

最後に、ワークシートに記入された意見を基に、生徒は自分の意見を整理し直し、最終的な意見の記述を行った。最終的な意見の記述については、10分程度の時間で書ける程度とした。

#### (ウ) ワークシート

今回の検証授業で使ったワークシートは左側を意見を整理するための欄、右側を最終的な意見を記述するための欄として作成した(図5)。左側については上段を最初の自分の意見を記述する欄、中段以降を他の生徒の意見等を整理する欄とした。

どの生徒もワークシートに記入した様々な意見を見比べながら自分の考えを整理し、最終的な自分の意見としてまとめ、記述していた。最初の意見を書かせるためにある程度の時間が必要だったのに対し、最終的な意見の記述では、限られた時間の中で、賛成・反対意見、メリット・デメリットを比較しながら記述していた。

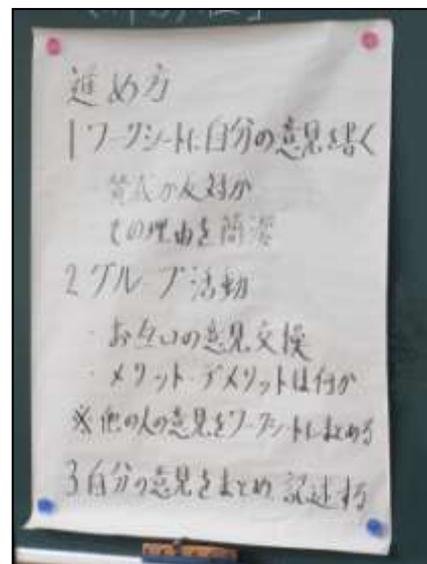


図4 授業の流れの掲示

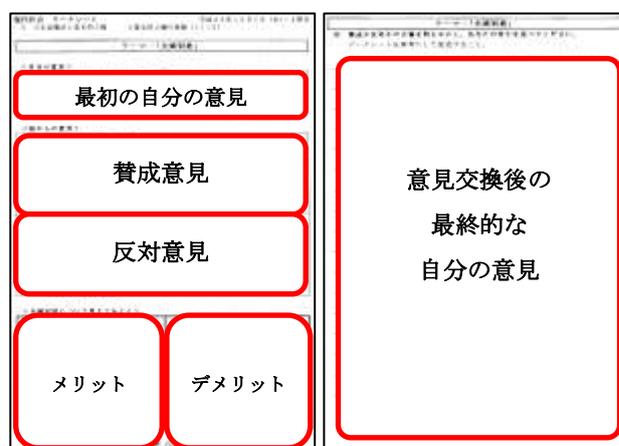


図5 ワークシートの配置

ウ 生徒の変容

(ア) ワークシートの分析

授業最初に記述する意見はグループによる意見交換の基となるため、全ての生徒が記入を終わるまで時間を掛けた。事前に関連資料を配布し、授業初めにテーマについて補足説明も行った。しかし、ワークシートを検証した結果、全ての生徒が記述はできていたものの、賛成・反対の理由が曖昧な生徒が30%(12名)いた。グループによる意見交換後の最終的な意見記述を検証してみると、全ての生徒がワークシートに整理した意見を基に、具体的な例を挙げた意見記述を行っていた。

下図の生徒の記述を例に見てみると、授業最初の意見記述では「夫婦になっていないみたい」との理由から「夫婦別姓」に反対する意見を述べた。この後、この生徒はグループでの意見交換を基に賛成と反対、メリットとデメリットについてそれぞれ意見を集めた。その意見を基に、テーマについて再考し、最終的な意見記述では授業最初の段階と同じ反対の立場で意見を記述した。しかし、授業最初の段階よりも更に具体的な反対理由を記述し、また、メリットを取り上げデメリットと対比させて考えている部分が見られた(図6)。このことから、生徒は意見交換によって記述に必要な情報を集めただけでなく、様々な情報を整理し、自らの思考を深めていったと考えることができる。他の生徒のワークシートからも同様の記述の変化が指摘できた。

<p>授業最初の意見</p> <p>私は夫婦別姓に( 賛成 ・ 反対 )です。</p> <p>理由：夫婦になるのに姓が違っているのは夫婦になっていないみたいだし、いろいろと大変だと思うから。</p>	
<p>メリット</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・嫁・姑問題が減る。</li> <li>・社会的手続きがいらぬ。</li> <li>・<b>仕事上の問題</b></li> <li>・男性の姓を強調せずにする。</li> <li>・<b>新しい姓を覚えなくてよい</b></li> <li>・墓が守れる。</li> </ul>	<p>最終的な意見</p> <p>私は、「夫婦別姓」の問題について反対です。</p> <p>なぜかという、結婚しても姓が別名だと全然夫婦になんて感じにならない。でも、姓を同じにしたところ<b>仕事上の問題</b>がでたり、知り合いの人や友達も<b>新しい姓を覚えなくてはいけない</b>などの問題があるが、家族のこと、<b>子どものことを考えたら</b>、絶対夫婦別姓はイヤなと思う。</p> <p>姓が変わる方が自由だしいと思うけど先祖の墓などのこともいろいろあるからそういうことを考えるとやっぱり夫婦別姓にしていくと大変なことだと思う。</p> <p>だから、家族の一体感を損なわないために「夫婦別姓」ということに反対です。</p>
<p>デメリット</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・<b>子どもが困る。</b></li> <li>・お金の数が増える。</li> <li>・いつまでも他人のよう</li> <li>・子どもが増えたと姓が増える。</li> <li>・<b>結婚していないよう。</b></li> <li>・どちらの姓を使うのかわからない。</li> <li>・娘・息子をとりた感じ。</li> </ul>	

図6 生徒が作成したワークシート(一部抜粋)

(4) アンケートによる分析

授業後アンケート調査を行い、グループによる意見交換の効果について検証を行った。「夫婦別姓」をテーマとして取り扱った授業について、「簡単に意見が作れるテーマだったか」を尋ねたところ、意見の形成が「簡単だった」、「まあまあ簡単だった」と回答した生徒は65% (26名) だった。反対に、「まあまあ難しかった」と回答した生徒は32.5% (13名) あり、「難しかった」と回答した生徒は2.5% (1名) だった(図7)。

次に、「最後の自分の考えには、ワークシートに整理した事を参考に記述できたか」と尋ねたところ、「できた」と回答した生徒は57.5% (23名)、「ある程度できた」と回答した生徒は42.5% (17名) だった。「あまりできなかつた」、「できなかつた」と回答した生徒はいなかった。

また、「グループでの意見交換は自分の考えをまとめる際に役立ったか」を尋ねたところ、「役立った」、「ある程度役立った」と回答した生徒は97.5% (39名) だった(図7)。

さらに、テーマが「まあまあ難しかった」、「難しかった」と回答した14名の生徒のうち、意見交換が「役立った」と回答した生徒は9名、「ある程度役立った」と回答した生徒が4名、「あまり役立たなかつた」と回答した生徒は1名だった。

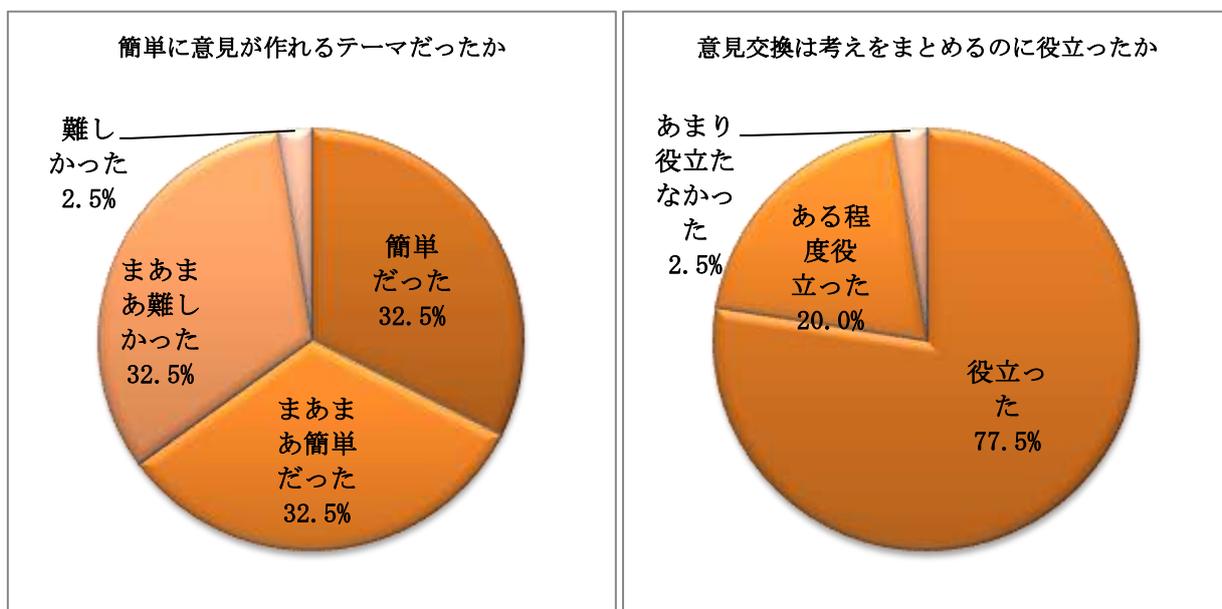


図7 授業アンケートより

意見交換が「役立った」理由としては、「他の人の意見を聞いて自分の考えがまとまった」、「自分と違う考えの人の意見はとても役に立った」、「(ワークシートに)書くことが増えた」、「自分だけではわからないことがあった」などを挙げた。意見交換が「あまり役立たなかつた」と答えた生徒は、「緊張したから」とその理由を述べた。

以上、ワークシートの生徒記述の比較とアンケート結果より、あるテーマについて意見を形成するためには、他の生徒と意見を交換させることに効果があるといえる。たとえ、ある生徒にとっては難しいテーマであったとしても、グループで意見交換することでお互いに知識を補い合い、共通点や差異を見付けることができる。また、頭の中に考えはあるものの言葉や文章として十分に表現できない場合でも、他の生徒の意見を聞くことで、自らの意見形成に必要な情報を集め、記述に結び付けることができる。人との対話によって共通点を見いだしていく作業が社会的な価値観を形成していく過程であるとすれば、他の生徒との意見交換を生かした授業づくりを行っていくことは、公民科の授業にとって大切な要素であると考えられる。

## エ ユニバーサルデザインの視点

### (ア) ワークシート

今回の研究で意見形成のために使用したワークシートは、最初にテーマについて自分の意見を記述し、それを基にグループでの意見交換を行えるよう構成した。生徒は、賛成意見・反対意見等をワークシートに記入していきながら、他の生徒の考えを理解し、また、自分の考えを整理していった。このような思考作業は、頭の中で行える生徒がいるし、ノートの余白等に意見を整理しながら考える生徒もいる。しかし、ワークシートを活用させることで、こうした思考作業を誰でも同じように行えるようにした。ワークシートを用いて、初めから手順どおりに進めていけば、誰もが意見を記述するための材料を集め、整理し、筋道を立てて考えを深めることができるようになった。

また、ワークシートの最終的な自分の意見を記述する欄(p. 72図5)は、「罫線あり」、「罫線なし」、「原稿用紙」の3種類を準備した。「罫線あり」のワークシートに記述した生徒は30名、「罫線なし」に記述した生徒は10名おり、「原稿用紙」に記述した生徒はいなかった。ワークシートを選んだ理由を尋ねたところ、「罫線あり」のワークシートを選んだ生徒と、「罫線なし」のワークシートを選んだ生徒のどちらも「書きやすいから」と回答した。記述のしやすさが生徒によって異なることの表れと考えられる。原稿用紙のみを使った授業では、「(原稿用紙の)マス目があると(そのマス目を)埋めることに気持ちが向いてしまう」と授業後のアンケートに回答した生徒がいた。授業の目的が意見を記述させることにある場合、生徒にとって記述のしやすいワークシートを提供することで、他の問題にとらわれず記述できるようになる。これは、UDLの原則からも大切な考え方といえる。

### (イ) 板書

グループでの意見交換を円滑に進めるため、図4(p. 72)の授業の流れを掲示した(図8)。これにより、授業の流れが確認でき、最初の意見交換を終えたグループが、次の話し合いへ進んでいた。模造紙での授業展開の掲示は口頭でも済むし、準備に手間が掛かるのだが、生徒によっては有効に活用されていたようである。



図8 授業手順の掲示

### (ウ) 日常の授業における視点

公民科の授業用ワークシートは、授業進度を保つために、膨大な量の情報を整理し、重要語句を記入するために主に作成される。このワークシートにユニバーサルデザインの視点を取り入れ、改善できれば、生徒の学習を更に手助けするものとなる。今回の研究で作成したワークシートでは、ワークシートの表題と教科書の単元名とを対応させ、教科書のページ数も記載した。また、ワークシートの見出しも教科書の小項目

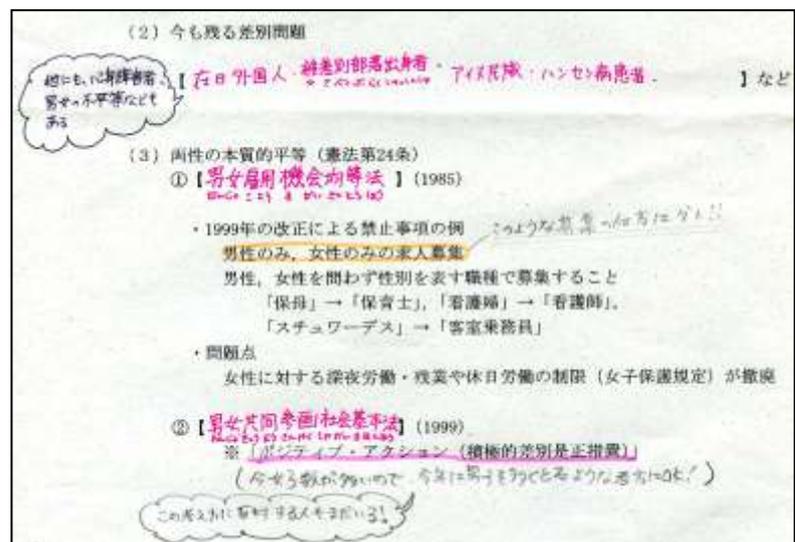


図9 生徒が記述したワークシート(一部抜粋)

と対応させた。そうすることで、教科書のどこが授業されているのか分からなくなることを防いだ。

次に、ワークシートの行間を広めに取り、B5版1枚に記載できる内容をB4版1枚の大きさで作成した。生徒は余白を自由に使い、授業中の気付きなどを書き込み、ワークシートを自分流にアレンジしていた(前頁図9)。また、ワークシートの記入欄に番号を付け、板書の際にはその番号を記述することで生徒のワークシートへの記入を補助した。さらに、ワークシートと同じような形式で板書を行い、ワークシートへの誤記入を防いだ。

## 7 研究のまとめと今後の課題

### (1) 研究のまとめ

本研究を通して、次のようなことが明らかになった。

- ・ グループによる意見交換の場を設定することで、生徒は自分の意見を整理し、深めることができ、より具体的な意見をもつことができるようになった。
- ・ 意見交換を通して、生徒は様々な意見に触れ、多様な価値観を踏まえながら思考し、自分の考えを形成することができた。
- ・ ユニバーサルデザインの視点をもってワークシートを作成したことで、生徒が目的を明確にして学習に取り組めるようになった。
- ・ ユニバーサルデザインの視点をもって授業を検証し直すことで、学習上のつまずきとなる点を改善し、生徒は学習に集中して取り組むことができた。

### (2) 今後の課題

- ・ 現代社会の諸課題を追究し、その課題を解決するために、日常の授業において生徒に意見を形成させる授業の研究
- ・ ユニバーサルデザインの視点による授業での生徒支援の在り方と、生徒の学習意欲の高まりの検証方法の研究

### 《引用文献》

- 1) 文部科学省 『高等学校学習指導要領解説公民編』 平成22年6月 教育出版 p. 3
- 3) 東京日野市公立小中学校全教師・教育委員会with小貫 悟編著  
『通常学級での特別支援教育のスタンダード』 2010年 東京書籍 p. 22
- 4)5) 寺本 潔編著 嘉納 英明・山内 かおり・道田 泰司  
『言語力が育つ社会科授業』 2009年 教育出版 p. 15, p. 26

### 《引用URL》

- 2) 文部科学省 「特別支援教育」 2012年2月  
[http://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/tokubetu/001.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/tokubetu/001.htm)

### 《参考文献》

- ・ CAST著 金子 晴恵・バーンズ亀山 静子翻訳  
「学びのユニバーサルデザインガイドライン」 2012年2月  
[http://harue.no-blog.jp/udlcast/files/udl\\_guidelines\\_1\\_0\\_japanese.pdf](http://harue.no-blog.jp/udlcast/files/udl_guidelines_1_0_japanese.pdf)

### 《参考URL》

- ・ 日本学生支援機構 「平成23年度(2011年度)大学、短期大学及び高等専門学校における障害のある学生の就学支援に関する実態調査」 2012年2月  
[http://www.jasso.go.jp/tokubetsu\\_shien/documents/press\\_h23.pdf](http://www.jasso.go.jp/tokubetsu_shien/documents/press_h23.pdf)
- ・ 佐賀県教育委員会 「佐賀県立高等学校再編整備第二次実施計画」 2012年2月  
<http://www.pref.saga.lg.jp/web/var/rev0/0074/3035/nizikeikaku.pdf>